令和６年度第１回山梨県子ども・子育て会議（議事録）

１　日　時　令和６年７月 23 日（火）13:15～15:30

２　場　所　山梨県防災新館１階オープンスクエア

３　出席者（委員）

秋山麻実委員、石原まゆみ委員、遠藤清香委員、加賀美尤祥委員、
鎌倉修委員、窪田清委員、権守貞則委員、佐藤秀樹委員、鈴木信行委員、
髙野牧子委員、田草川耕委員、土橋順委員、廣瀬集一委員、福島陽子委員、
村上加寿子委員、渡邊美南子委員、相原正男委員、内藤陽一委員

４　会議次第

（１）開会
（２）あいさつ
（３）議事
（４）閉会

５　会議に付した事案の件名

・山梨県こども計画（仮称）について

６　議事（質疑）の内容

・　基本施策の「こどもの居場所づくり」については、基本方針４「青少年の健全な育成と環境整備」のところで、安心して自分を表現できる生活の場を整備するというような形に変えるなり、増やすなりということをお考えいただきたい。
・　ひきこもりだとか、いじめとか不登校とか自殺とか、様々な、困難があるこどもたちの支援だけではなくて、ごく普通に生活しているけれども、居場所が欲しい、自分の表現ができるチャンスが必要、あるいは、自分たちが社会参画していける窓口が必要などと考える子どもたちの潜在的なニーズに応えていくことも必要。
・　生活に困難を抱える女性たちの支援の中では、必ずしも経済的な困難だけを抱えているのではなくて、不安感であるとか、例えば暴力にさらされているとか、自分に自信を持てないでいるとか、あるいは親たちの姿を見て将来に期待を持てないでいるといった課題もあるので、貧困対策だけではなくて、子どもたちが抱えている失望であるとか、そういったことを対応する精神的なケアというのが必要ということもどこかに組み込んでいただきたい。
・　大学生の意見という中で、赤い字で書かれたところは拾ってくださったところなんだと思うが、それ以外の黒い部分にも、子どもや学生たちの願いが、とても書かれているのかなと思いますので、今ここにいる私たちが自分たちの現場で実現できることではないこと、例えば交通機関の話であったりをもう少し計画の中に反映させられる

と良いのかなと思う。
・こども政策に関して自分の意見を聴いてもらえていると思うこども・若者の割合という指標を山梨県のこども計画の中でも取り入れて、取り組んでもらえると、もうちょっと良いかなと思う。
・　基本的な構成等は非常によくできていると思っております。
・　一本化される 3 つのプランに書かれていることを取りこぼしなく、1 つの形にしていかなければいけない。
・　基本指針「すべてのこどもが健やかに育つ社会の実現」のところに、障害のあるお子さんであるとか、外国籍のお子さんであるとかへの支援が明記されていないのは問題かなと思いました。
・　男女共同参画の推進というところで、どんな子どもも自己実現できる方向を目指すところを少し明確にしていけたら良いのではないか。
・　「こども」の表記は、ひらがなのこどもでいくということで、計画は年齢によらず心身の発達過程にある者を対象として進むということで確認をさせて頂いた。
・　６つの基本指針が示されていますが、これらは全てを一斉にやらなければいけない、順番でやるというイメージではないということを確認しておきます。
・　基本方針の１番に「将来に対する希望の形成と実現の支援」がきているのは、若者の意見の反映というところがかなり強く影響したのだと思うが、こどものプランを考えるのに「はじめの１００か月の育ちの質の向上」を２番目にもってくるというところは順番が違うのではないかと思う。
・　妊娠初期の段階から思わしくない養育体験を受けてしまうところから発している問題が、社会的養護の根っこの問題だと考えておりますので、アタッチメント形成、着床した段階からスタートするこどもの発達というか観点から、こどもの問題を考えていく社会、それがこども計画の中の基本に入っていくべきだと考えています。
・　他の国ではあまり例のないことですが、日本では１００％近い子どもが０から６歳という時期にその養育の場が外在化されており、日本は家庭から離れて育つ、その時間が圧倒的に多い国であるということを考えるときに、もっとそこに焦点化したこどもの養育のプランを立てていただかなければならないし、そうすべきで、そうすることによって、日本の子ども・子育て施策は大きく変わるという風にずっと考えてきておりますので、その点だけ強調させていただきます。
・　生涯にわたるウェルビーイングの向上にとって幼児期が最重要
・　誕生前から、概ね 7 歳、小学校 1 年生ぐらいの 100 ヶ月の、この期間のウェルビーイングは、すべての人に保障されなきゃならないウェルビーイングであり、それによって、幸せな一生をおくるための基礎ができる。
・　特に私たちが思いをいたさなければいけないのは、乳幼児の思いや願いの尊重ということで、言葉はないけれども、泣いたり笑ったりって、何とも言えない表情の中で、実は訴えかけて、声として発している。
・　青少年の声を聞くのと同時に、生まれたばかりの赤ちゃん或いはお腹の中にいる胎児の声もある意味、私たちは聞くべきである。
・　ワーワー泣いたりするのが、実は最初の訴えですが、子どもの声をその都度拾って、

それに応えていくことで、これが愛着の形成、アタッチメントになる。

- 本能的に不安でいっぱいの人が、愛着形成がされることで安心感が身につくというのが、アタッチメントの中心的な部分で、それが０歳から２歳までに基本ができると言われている。
- 愛着形成の基本ができて、要するに安心感が育って初めて集団教育である、幼児教育が可能になるわけです。
- 安心感が育っておらず、誰かが来れば自分が叩かれちゃう、噛まれちゃう、引っ掻かれちゃう､或いは､遊んでいるおもちゃを取られちゃうっていう不安感があったら、集団が成り立たない。
- 今、3 歳児、4 歳児で愛着形成が不十分な方が増えている。
- 愛着形成が不十分だから、集団教育を行う 3 歳児 4 歳児の混乱がひどい。
- 集団教育とは何か、幼児教育とは何かというと、言ってみれば非認知能力で、主体性とか我慢する力とか、それから社会性も含めて、その基礎が３歳から５歳までに育まれ、小学校に上がると、学びや何かを深めていく、言わば勤勉性が育てられる。
- ３歳から５歳までに育つべきその非認知能力が育たないから、小学校以上の教育が成り立たないという問題が発生する。
- 不登校やいじめ、それから子どもの自殺も含めて、自己肯定感が低いところに問題がありますが、そこが中心的な問題なのではないかという認識を持っている。
- ですから、まさに、その根本原因となっている、愛着が形成される０歳から２歳までの育ちを保障していくことが重要だが、残念なことに今の配置基準ではとても無理である。
- １歳で育休が終わった後に、保育園や認定こども園が預かるわけだが、家庭での虐待件数が２３０倍となっていることも考えると、保育の現場できちんと愛着が形成される保育ができなかったら、愛着が形成されるのは難しい。
- ０歳から２歳までの育ちが保障されれば、実は３歳以上の育ちにおいて起きている不登校とか、いじめとか、そういうことが、かなりの割合で改善されると思う。
- 発達障害がとても増えているが、これもかなりの割合が、愛着障害また愛着不全が原因だという話を聞いているので､ここが改善されることで､大きく変わって､社会、子どもたちも変わっていくと私は信じている。
- 今回、１００か月というのができたことで、人間のライフステージに沿った求められる支援の形が見えてきたのではないかと感じており、これによって妊娠したときからフォローを受けて、そして小学校入学につながっていけると形ができるという風に感じている。
- 小学校の方では、保育園との連携、幼稚園との連携ということを特に進めており、何かにつけお互いに情報交換しながら、小学校の方が幼稚園、保育園の方に行って様子を見たり、幼稚園、保育園は小学校に行って、授業に一緒に入ってみたりということでの連携を進めている。
- 子どもたちの状況ですが、やはり経済的に難しい家庭があったりするため、そうした家庭への支援をしているが、特に１人でお子さんを育てていらっしゃるご家庭なんかは大変厳しい状況で子育てをしているので、市の方からもサポートを受けながら支

援を進めているところであります。

- 学校で一番気をつけているところは、自己肯定感を高めてあげようというところで、これは経済的に困難な家庭のこどもだけの話ではなく、学校のいる全ての子どもたちの自己肯定感を高めるように、子どもたちを認めてあげる、できたことを褒めてあげるということを進めていって、将来に対する希望の形成と実現の支援ということにつなげていければというということで取り組んでいる。
- 保育士さんについては、人手不足で大変そうなのを保護者として見ていて感じているので、ぜひ人材の育成と配置に力を入れていただきたい。
- こども計画の策定に関するアンケート調査については、言語が違ったのかもしれないし、字が読めなかったり、オンラインで回答するスキルがなかったり、心理的、経済的に困窮していて、アンケートに回答するどころではなかったかもしれないというように、調査に回答できなかった家庭こそが実は困っているのではないかという視点を持って頂き、そうした届かない声をぜひ拾って政策に反映させていただきたい。
- 今、お話を聞いておりまして、このウェルビーイングが、最重要課題だと本当に思っているところです。
- 児童発達支援センターでは通常園からの移行児がとても多い状況ですが、その移行の際に、現場の保育施設の疲弊であったり、集団の疲弊であったり、そのお子さんだけではなくて、そのお子さんに関わっている子どもたちの疲弊であったり、また先生方の疲弊であったりというところが、とても見えています。
- また、それに伴って親御さんも大変心を痛めているところが見えており、そうしたところで、幸せに、幸せな状態、ウェルビーイングに、どうやったらしていくことができるのかっていうところを考えなければいけないと思っている。
- 特に障害を持っている子どもたちというところは、やはり大きな課題があると思っており、また愛着障害であったり発達障害であったりはわかりにくいところも幼児期の難しさの部分だと思うので、幸せな社会を作るには、まず小さな子どもたちを、いかに幸せに育んでいくかというところを考えていきたいと思っており、そのためには、やはり人材の確保というところは、すごく大事だと思う。
- 居場所づくりはとても大事ですが、そこにどういった人材がどのように関わることができるのか、またどのくらい予算をかけられるのかということが重要だと思う。
- 良い法律を作る、制度を作るっていうことは大事なところですが、現場をどうやって、そこまで持ち上げるのかというところもとても大事だと思っている。
- 近年は、放課後の子どもたちの居場所づくりという課題が出てきており、放課後の子どもたちが、なかなか良い居場所がない、学童であったり、放課後等デイサービスであったりっていうところに入るが、そこが本当にその子にとっていい場所なのかどうなのかっていうところの議論が、なかなかできていない状況で、そこではないところに、もっと合った居場所がある子どもたちもいるのではないかというところも考えていきたい。
- 子どもたちは学童クラブにいる方が、小学校にいるよりも時間が長いという話もありますので、空間的なものもありますが、先ほども話にでた心の居場所ということも含めてとても大切なことだと思う。

・　特に言われているのが中高生の居場所がないということ
・　ある高校生にどうしてそこにたむろしているの聞くと、家に居場所がない、学校にも居場所がないから、ここにいる、ここにいれば仲間がくるということだった。
・　居場所がないことによって一番怖いのは、あらぬ方向に行ってしまわないかということで、地域にちゃんとした居場所があることで、闇バイトみたいなものに近づくことを防ぐことができる。
・　こども食堂というと、こどもと名前がついているので小学校から下の子の参加は多いが、実は一番困っている中高生の参加は少ない。
・　グループとしては中高生の居場所をなんとかしようということもあり、格差には塾や習い事もありますが、お金がなくてもいけるような場所があって、なおかつ教えられる場所があればということで活動をやっている。
・　ＰＴＡに関われる方と関われない方というのはどうしてもいらっしゃって、そもそも行事に参加すること自体も、平日の日中であれば仕事の都合をつけて参加せざるを得ないということもあり、はどう仕事に都合をつけるかということはすごく大きな課題で、職場でまた子どもたちのところに行くのかみたいなことを言われたことがあるとも聞くので、こどもの計画ではあるのですが、やはりこどもの周りにいる大人たちに関する問題でもあると思います。
・　うちの会社では、突発的なことで仕事を抜けないといけないことがあっても笑顔で送り出したいと思ってやっていますが、やはり社会がそうあるべきで、経営者であったり職場に関わる方がそうした気持ちになっていただくということが一番大事なのではないかと思うので、それを山梨県のこども計画の中でどう位置づけるかというところまでは考えていないのですが、こどもたちを真ん中において、大人たちがどう考えていくのかということと、先ほどから出ている１００か月の育ちというところも、そこがその子の人生にとって一番大事な時期なんだと、また、子どもは大人になって、この国だったり山梨県を担っていく存在なので、こどもの質の高い育ちは、私たち自身にも関わるところなんだということが、なんとか大人に伝わっていけないかなという風に考えています。
・　山梨県こども計画が、子育て世帯だけでなく、すべてのこども、大人に届いていくような扱い方がなされると良いと思っていて、そこにつながっていけるような計画であってほしいと思う。
・　私どもの活動は自主活動ということで、主に声かけ、見守りをしておりますが、自主活動というのは非常に難しいところがあって、時代流れで担ってくださる方が非常に少なくなってきています。
・　かつては、となり近所みんなで子育てをして行こうよと言う時代でしたので役を担ってくれる方もたくさんおりましたが、最近は就労をしている方々も多くなっている中で役を担ってくれる方が少なくなってきたという問題がある。
・　人と関わりたくないとか、自分の家庭を知られたくないとかいうことで、お声がけをしようと思っても拒否をする方が非常に増えてきているという問題があり、自発的にこういうことに悩んでいるんですと相談してくれる方はまれで、あとは触れられたくない、関わられたくないという方たちが本当に多い。

・　たぶん結婚であったり、出産の、子どもの数であったりという問題に関わってくると思うのですが、地域の中で組に入らないとか、みんなで何かをしていくということを避けて、あまり人と関わらない中で自分の気持ちだけ、自分を主体に考えて生きていきたいという方が非常に多くなっていると思う。
・　１０日くらい前に、海外の方と交流させていただく機会がありましたが、その際にあちらの方々から、少子化と言って困っているようだけど、どうして少子化と言って困っているのだったら子どもをつくるように働きかけないのかという意見がありました。
・　また、産前産後ケアセンターを見学した後で交流をさせていただいたので、産後うつという問題があるのであれば、産前の状況の中で関わっていったらどうか、また父親がもっと子育てに協力をしていったらどうかという御意見をいただきました。
・　地域の子育てを支援するときに、来てくれる方についてはいろいろな形で支援につなげていくことができるのですが、多くの課題を背負っている方というのはなかなかコンタクトができないということで、お節介型の支援をやれというのが最近のはやりですが、赤ちゃんが生まれた家庭を半年くらいまでの間に、保健師さんが全戸訪問するという支援があるようですので、そこに地域の方々が愛育会も含めて、入って一緒に子育てをしながら、いろいろな課題を伝えていくということが、もしできたらいいかなということを思っている。
・　今までも子育てを支える環境というのを整えていくという感覚はありましたが、こども計画ではこどもの主観的な部分からも見るということなので、町の方でもそんな形で進めさせていただきたいと思う。
・　労働組合の立場からですと格差の解消というところが、今日聞いている中で一番心に響きました。
・　格差といってもいろいろとありますが、やはり子どもの貧困の格差の解消が必要ではないかなと思っている。
・　３年くらい前から団体の中で、現職で働いている方が子育て中に病気なり事故で亡くなられるた場合に、物資をお金を含めて支援を行っておりますが、山梨の中でも３年の中で十数件申請がでてきて､そこに手を差し伸べているというところがあるので、ぜひ県としても、違う着眼点でも結構なので手を差し伸べていただければと思う。
・　ヤングケアラーへの支援についても世間的に非常に課題になっている状況であると思いますが、連合山梨としても年に１回政策提言をしている中に教育という分野の中でヤングケアラーであるとか子ども・子育ての関係の要請を入れておりますので、そこをもう一度見直して頂いて、計画の策定に結びつくヒントがあればご活用いただきたい。
・　いろいろな問題を抱えたお子さんが増えているということで現場の方ではいろいろと心配事が増えている。
・　施策の展開のところで、今回重要だと感じられたのは将来に対する希望の形成と実現の支援で、今の子どもであったり、これから生まれてくる子どもであったりが、どのように出産や結婚に対する希望をもっていくかということが今後の少子化対策にもつながっていくのではないと思う。

・　全国の自治体でも給食費とか保育料の無償化を競い合うようにやって、県でも人口減少危機対策パッケージということでいろいろな子育て支援をやっていますが、ある一定の段階までは各団体が競い合うことで全体の子育て支援のレベルを上げるということは必要だと思いますが、一定程度を越えたら、教育の格差であったり、保育の格差というところにつながってくる部分もありますので、やはり国の施策としてやっていくということも、要望を通して、子どもたちが希望をもって生きていけるような社会の実現につながれば良いと考えています。
・　やはり、女性の育児負担が大きいということで、そこを男性にも育児・家事を一緒に担っていただきながら、一緒に子どもを育てていくと言った形をしていきたいというところがありまして、男性の育児休業の取得促進というところで、男性が育児休業を取得しやすいような制度の改正ですとかそうしたところを進めていますが、会社の方の理解がないとなかなか休みも取得しづらいというところもありますので、会社の理解を得ながら、男性の育児休業というものを整理していきたい。
・　あけぼの医療福祉センターでは、平成６年くらいには初診患者の８０％くらいが知的障害だったが、令和４年ぐらいになると初診患者は８倍近くになる一方で、知的障害でない子、つまり知能が正常である子が、集団不適応を理由としてリハビリにくる割合が８０％ぐらいとなっている。
・　常駐学級の対象児童数も、平成２４年には山梨県全体で３４０人くらいだったのが、令和４年には１４００人、１０年経ったら４倍にもなっており、子どもの数は減っているのに常駐学級のお子さん、集団不適応のお子さんが４倍近くに増えているというのが現状で、やはり個別指導をしなくてはいけないので、教員の数もかなり逼迫している状況である。
・　妊娠の管理ができていないと、切迫流産だとか胎盤早期剥離とかで飛び込みの受診につながってしまうが、そういうのは胎児虐待と言えるので、母子手帳をもらいに来たときから関わっていく形が非常に大事。
・　今の人にとっては、他の人とかかわりあうというのは自分の人生にとってノイズであるという価値観があり、ですから当然、結婚もしないシングルになるし、あるいは昔からあるようにＤＩＮＫＳ、ダブルインカムノーキッズってことで、自分たちの人生だけを楽しむという考え方になっている。
・　こうした価値観は、基本的には脳の奥の部分、つまり意識のないところから教育していかなければならないので、例えば中学生くらいの時に、７，８か月くらいの赤ちゃんを抱いてもらい、こどもの重さ、生命の重さを感じてもらうボトムアップの教育を行って、心が動くようにしていくというようなことが必要になる。
・　法律で家に立ち入ることが許されているのは警察と児相と保健師だけなので、家の中に入って行けて、かかわりあいになっていける保健師に、ぜひこの会議に関わっていただきたい。
・　母子のことからすると、思春期くらいの頃から赤ちゃんの重さを感じる、それから母子手帳交付のところからまわりの人が関わっていくということが非常に大事。
・　虐待を受けたお子さんについては、ほとんどが同じ症状で、非認知能力の障害があって、自己抑制が効かない、感情が抑制できない、それから、自尊心が低いという特

徴がある。

- どんな虐待の子も、お母さん、お父さんが悪いのではなくて、自分が悪いから虐待をされるという思いをもっていて、自分を否定していくから、当然、自尊心は低くなるし、また、人への理解と信頼がないから、他者とのコミュニケーションができない。
- 虐待の子はみんな同じで、自立支援会議を行うとその３つが常にあがってきて、非認知能力障害についてどうしたらよいかということをやっているのが現状。
- 非認知能力がある人がやはり社会的にも健康面でも、あるいは幸福度でも有意差をもって高いというが研究結果がある。
- 別の研究では、幸福は社会的なポジションとかお金の問題ではなくて、良好な人間関係に感じるという結果もある。
- 人は人生の幸福度を最も感じるのは良好な人間関係だと感じるように脳は設計されていて、集団の中で生き残っていくように脳が設計されているので、虐待とかいじめとか、集団から排除されるような状況は脳がすごく心が痛むようになっている。
- そういうことから考えると、こども計画に関しては、基本理念、いわゆる目的には良好な人間関係、そういうニュアンスのものが非常に必要である。
- 貧困対策はもちろん大事だが、親子関係ができている貧困だったら決して不幸せにはならないので、もっと本質的に重要なこととして、人間関係を保つために、非認知能力、社会情動的能力とも言いますが、そういった能力を伸ばすためにもっと幼少期、乳幼児期からの政策に力をいれることが必要である。
- 人間の脳は可塑性というものがあって、幼児期であればあるほど可塑性が高いので、コストパフォーマンスの面から考えても、山梨県の方針として乳幼児期にウェイトを置いた事業計画をたてることを非常に勧めたい。
- 幼児期の虐待等で受けた脳の傷は、２０歳くらいまでは、親でなくても周りの努力で治せるということが最近発表されています
- 保育の現場、教育の現場で先生方が担わなければいけないことがとてもとても多くなってきていますので、先ほどお話しにありましたリハビリストのかた、作業療法士であったり言語聴覚士であったりといった医療の専門職の方が学校に入ってくれるということがこれから必要なんじゃないかなと思っています。
- 本日はこどもの愛着の育ちについてたくさん議論がありましたが、乳幼児期を通り過ぎてしまった子どもたちが、現実にいて、今困っているので、そちらの方も含め、両輪で進めていただきたい。